E 21　江戸時代中，後期の住まいについての研究
——家相の文献を通して——（第三報）

東京家政学院大学　○中原暢子　村田あが　殖産住宅相互㈱　矢藤仁美

目的　前出2報の結論として，江戸から現在に至るまで，家相を通しての住宅の考え方がどう変わって来たかを，文献と，小設計事務所30年間の住宅設計の結果の調査から推論してみた．

方法　大正，昭和は，建築学界としては，伊東忠太，武田五一の論文を中心に，さらに家政学界としては，大江スミ（東京家政学院大学創設者）の文献を中心として論証する．
調査としては昭和33年から現在まで，私の設計事務所（林・山田・中原設計同人）に於て設計管理した戸建住宅（約 300件）について建主が，家相にこだわった場合，全く無関心の場合，その中間とにわけて調査してみた．調査項目等は当日の発表資料による．

結論　文献からは，家相は迷信であるとか，衛生学であるとかいろいろ論争もされているが，科学的に解決して住宅を考えようとする傾向が見られる．特に昭和初期までは住宅の規模が大きく，現在の２ＤＫのマンションなどは問題にされそうもない．
しかし一方，現実に住宅を建てようとする建主にとっては，家相はまだ捨てがたい力をもっている．（非常に偏った調査ではあるが，設計者は一様に家相にこだわらない意識をもっている．）よい家相にすることで，家族が健康で，商売繁盛，子孫繁栄等の目的を積極的にもっている人は極めて少数．しかし，“何だかわからないけど，昔からよい”といわれている家にしたい，“難”はさけたいのである．結局松浦琴鶴のいう，“人の行正しければ，すべての凶相も吉に変ずる”は生きているのか？